# 「人々が集う場としてのカフェ」のデザイン

**山納 洋**　大阪ガス株式会社近畿圏部

近年「コミュニティカフェ」と呼ばれる、公共性を志向するカフェが増えてきている。

コミュニティカフェとは、地域住民やNPOが高齢者・障害者・子育てへの支援、世代間・国際交流、生涯学習、まちづくりといった公共的なテーマのもとに、カフェを開いたり、定期的に人々が集まることができる場を作ったりという動きのことをいう。「地域の茶の間」を作り、人や情報の交流を活発にすることで、地域におけるさまざまな問題を解決したり、人間関係を再構築したり、そこに集う人たちの可能性を広げたりすることを目的にしている。

実際に飲食店としてカフェを運営しているところでは、地元食材を使ったランチを提供していたり、障害者作業所で作られたパンやクッキーを売っていたり、日替わりシェフというシステムを取り入れ、地域の主婦が食事を提供しているところも出てきている。

**「サードプレイス」の概念と役割**

このコミュニティカフェの必要性の論拠となっているのが、アメリカの社会学者、レイ・オールデンバーグが提唱する「サードプレイス」という概念である。彼は、家と職場（学校）の中間地点にある、パブリックでありプライベートでもある「第三の居場所」の重要性を指摘している。

ハワード・シュルツ、ドリー・ジョーンズ・ヤング著『スターバックス成功物語』の中には、こんな記述が出てくる。

> オールデンバーグは次のように述べている。人間は、形式張らない社交の場に集い、仕事や家庭の問題を忘れ、くつろいだ雰囲気で話をしたいという欲求を持っている。ドイツのビアガーデン、イギリスのパブ、フランスのカフェは、日常生活の憩いの場だ。そこはニュートラル・グラウンド（中立地帯）であり、社会的地位はさておき皆が平等に扱われ、会話が主たる活動となる。
>
> アメリカでも、かつては居酒屋、床屋、美容院などがそういう場所だった。だが、郊外化の進展とともに、これらの場所は姿を消しはじめ、自己充足的な郊外型住宅に取って替わられた。こうした場所がないため、都市生活の本質であるさまざまな関係や人との多様な接触が欠落することになる。この欠落の故に、人々は群衆の中にあって孤独な状態にとどまっている。[*1]

オールデンバーグのサードプレイス論は、アメリカでは郊外居住の進行とともにインフォーマルな交流の場が失われつつある、という背景を前提としている。日本の地域社会も郊外化によるコミュニティの崩壊や新旧住民の断絶、少子高齢化の進行といった社会的課題を抱えているが、コミュニティカフェの動きはそうした状況の中、「くつろいだ雰囲気で話ができる場」をとりもどし、地域コミュニティの再活性化を図るための取り組みと捉えることができる。

カフェとはとりもなおさず、飲食物の提供を行うビジネスの場であるが、文化性や公共性を担保する場としての意味合いを併せ持っている。普段の仕事や生活からいったん離れてリラックスするための場が、誰かと出会い、情報に接し、刺激を受けることで、今まで思いつかなかった何かが生み出される、そんな創発の場としての役割を果たし得るということである。また飲食を楽しみながらアートや音楽などに気軽に親しむことのできる場としても、カフェは大きな役割を果たすことができる。以下にそうしたカフェの役割について考えてみたい。

## カフェが生み出すイノベーション

カフェの意義としてまず注目したいのは、「イノベーションの場」としての可能性である。ただ喋るだけでなく、そこでの会話から、今の地平を超えた何かが生まれてくる。そんな創発の場としての可能性がカフェにはあり、昔から数々の伝説として語られている。

特に17世紀から18世紀にかけてのイギリスのコーヒー・ハウスは、きわめて多岐にわたる役割を果たしていた。ここはまず政論の場であり、さまざまな意見の人たちがコーヒーの香りと紫煙の中で政治を論じ、権力を批判し、革命を鼓舞していた。またビジネス情報センターとして新興ブルジョワジーの経済活動に貢献し、そこからロイズを始めとする保険業も生まれた。またコーヒー・ハウスで得られた情報をまとめた新聞・雑誌が次々と発行されるなど、ジャーナリズムの発生・発展とも関わっている。そしてコーヒー・ハウスに集まった文人たちが、詩や演劇を批評し合い、議論をしながら構想を練り上げていくというように、当時の文学界とも密接な関わりを持っていた。

さまざまな人が出会うことで、政治的な議論が成熟したり、新たな産業が起こったり、メディアが生まれたり、芸術文化が

＊1　『スターバックス成功物語』ハワード・シュルツ、ドリー・ジョーンズ・ヤング著
小幡照雄、大川修二訳　日経BP社　1998年

▶写真1　ひがしまち街角広場

そこから花開いたりというように、歴史的にカフェは、社会を動かすイノベーションの揺籃として機能していたのである。

**「ソーシャル・キャピタル」を醸成するインフラ**

近年でも、異分野交流とコラボレーションのための場として、カフェは注目を集めている。

アメリカの政治学者ロバート・D・パットナムは、イタリアの地方政府の事例を研究し、投票行動、新聞購読、教会の合唱団や読書サークル、ライオンズクラブ、サッカークラブへの所属など、市民参加の強い伝統のある地域が、効果的な政府や経済発展を果たしていることを発見した。しかも、そうした地域には、「ソーシャル・キャピタル」（信頼に基づいた社会的つながり）が醸成されていると指摘している。市民が信頼し合い、協調・連帯していける土壌をつくること、「市民共同体」が地域に根付いていることが、地域におけるイノベーションの源泉になるという考え方である。

この「ソーシャル・キャピタル」を醸成するインフラとして、カフェは大きな可能性をそなえている。シリコンアレー、シリコンバレーなど、アメリカのクリエイティブ産業の集積地でも、カフェにおけるコミュニケーションがイノベーションを促進したと言われている。日本でも10年ほど前に、各地に「ビジネスカフェ」、「ビズカフェ」と呼ばれるカフェが登場した。そこは起業家、クリエイター、支援事業者、起業を志す学生などが集い、コーヒー、時にはアルコールを片手に自由に情報交流ができる溜まり場、情報交流の場のことであり、飲食業というよりも人の集まりやネットワークのことを指していたようである。

**「ワールド・カフェ」というダイアログの手法**

近年では、人と人をつないで会話を誘発し、多様な人々の思いをまとめ、優れたコンセンサスを生み出すといったファシリテーションの手法が注目されるようになっている。「ワールド・カフェ」と呼ばれる、1995年にアメリカで始まり、今では世界中に広まっているダイアログの手法がある。集まった人たちが

▶写真2　さたけん家

3、4人のグループに分かれ、決められたテーマについて各グループがカフェのテーブルを囲んで20分程度話し合う。時間になったら人々はテーブルを移動し、新たなグループを作って何回かのダイアログを重ねる。少人数のリラックスした雰囲気の中で、参加者同士が質問を通じて気づきを促し、そこから生まれたアイデアがテーブルからテーブルへと伝わり、知識が共有されていくというものである。ここでは、実際のカフェを運営するのではなく、イノベーションを生み出すカフェ的会話ができる場を作る、という営みになっている。

## 文化施設としてのカフェ

近年のカフェはまた、「文化施設」としての役割も果たすようになってきている。

飲食を楽しみながら芸術や文化に触れることができる空間には、古くは西欧のキャバレーやカフェ・テアトル、また日本でも、スナックでの音楽演奏やライブハウスなどがあったが、個人が経営する小規模のカフェが、表現空間としてその可能性を開花させたのは、2000年前後のカフェブームの頃のことである。絵画やイラスト・写真の展示、音楽ライブやポエトリーリーディング、トークショー、講座・ワークショップなどのイベントが多くのカフェで開催されるようになり、今では一般的な営みとして定着している。飲食以外の収入源を持つことでお店の経営の足腰を強くするという意味合いだけでなく、イベントを開催することで「わざわざ性」が生まれ、それまでお店を知らなかった、または知りつつも来たことはなかった人たちが足を踏み入れ、その後の営業の時にも来てくれるようにもなるというメリットも、そこにはある。

日本では80年代には企業が、90年代になると行政が、さまざまな表現を支えるための器として劇場や公共ホールを次々と建設したが、2000年前後になると、その予算を減らして事業を縮小させていった。そうした動きと入れ替わるように、個人経営のカフェが、経済的に自立した「文化施設」としての意味合いをそなえるようになってきたといえる。

**人がつながるカフェの経済的維持**

長期化する景気低迷の中、カフェ経営をめぐる状況はかなり難しくなってきている。そうした中、自宅や個人事務所の

＊2 『バール、コーヒー、イタリア人――グローバル化もなんのその』島村菜津著 光文社 2007年

ようなプライベートな空間を、ホームパーティ、文化教室、子育てサロン、アトリエ、私設図書館など、さまざまな人が集まれるパブリックな空間として活用する、という動きが広まってきている。日常編集家のアサダワタル氏は、こうした動きを「住み開き」と名付けている。

数年前からよく聞かれるようになった「おうちカフェ」、「自宅カフェ」というスタイルの中からも、場づくりに軸足を置き、出会いや気づき、学びの場を創出するといった試みが、活発に行われるようになってきている。このように、文化的な場づくりを志向する動きは、一つには家賃という制約から自由になる、という選択をしている。

また、カフェをシェアする、という動きも見られるようになってきている。

イタリアには、「CIRCOLO＝チルコロ」と呼ばれる、地域に暮らす人たちのレクリエーションと文化活動・社会活動を支援する組織がある。エイズ問題、ゲイ差別や移民問題、失業者の職探し、子供の教育、老人ケア、囚人の社会復帰などの社会活動を中心としているが、バールや食堂の経営を手がけているところもある。

島村菜津氏の著書『バール、コーヒー、イタリア人――グローバル化もなんのその』の中には、こんなチルコロが登場する。

> もうずいぶん昔、イタリア・アペニン山脈に程近いトスカーナの峠で、「CIRCOLO=チルコロ」と書かれた店を見つけた。ポテトチップス、駄菓子、コーラにワイン、どう見ても工場から配達された菓子パンの類。これといって特別なものは何もない普通のバールだ。
>
> 少し埃っぽい店には、これまた愛想のない主人がいて、黙ってコーヒーを淹れてくれた。するとその後ろのカレンダーに日替わりで人の名前が書き込まれている。これが、どうしても気になって訊ねてみると、何と黒いチョッキ姿も堂に入ったこの主人、普段は林業に携わっているのだという。くだんの表はバールの当番表で、この日は彼の番なのだという。
>
> つまり、山間部にあるこの村には、バールが一軒もなかったが、コーヒーを一杯飲んで一息つく、バールくらいは欲しい。ところが、個人で営業しても、十分な収益をあげるには村人の数が少なすぎる。というわけで、村中の人が、ほぼ月に一日ずつの当番制でバールを経営しているのだ。それは、町の寄り合い所としてのバールとの劇的な出会いだった。*2

個人経営ではお店が成立しない地域において、行政に頼ることなく、みんなでカフェをシェアするという試みが、もうずいぶん昔からイタリアの山間地で行われていたという話であるが、こうした取り組みは、日本でも増えてきている。

▶写真3　木村邸

▶写真4　どぶロックフェスティバルの風景

大阪府千里ニュータウンの一角、新千里東町の近隣センターにある「ひがしまち街角広場」は、地域の主婦が日替わりで飲み物の提供や施設の管理を行う「100円喫茶」である [写真1]。オープンしたのは2001年。豊中市の社会実験として空き店舗を改装して半年間運営された後、地元の主婦がボランティアで喫茶店を引き継ぎ、すでに10年以上続いている。昼前になると、地元の主婦や高齢者などが集まり、井戸端会議が始まる。

また吹田市佐竹台近隣センター内には、「さたけん家(ち)」という名のコミュニティカフェがある [写真2]。オープンは2011年。同カフェを立ち上げたのは、地元で活動する市民団体「佐竹台スマイルプロジェクト」と地元の有志。地域住民が世代を超えた交流の場をつくり、地域コミュニティを形成することをめざしている。場所を提供したのは、同センター内で書店「アカデミー書房」を半世紀近く営んできた坂本美千代さん。カフェの店番は日替わりで、近所の主婦や福祉施設のスタッフが務める。

筆者自身も大阪・キタの中崎町で日替わり店主カフェ「コモンカフェ」の運営に関わっているが、人と人とがつながる場を維持する方法としての「シェア」は、これまで以上に現実味を帯びる時代がやってくるのではないかと考えている。

### 場を継承するプロジェクト

自治体やまちづくり会社、公共的企業などが事業主体となって、近代建築や伝統的建築などの歴史的建築物を改修し、そこに高級レストラン、スウィーツカフェなどの実力あるテナントを誘致して、まちづくりの拠点とするという試みが全国的に行われている。地域に残された歴史的資産をブランディングし、地域への集客に活かすという公共事業である。

その一方で、プライベートな人の集まりが、歴史的建築物や場所への愛着を起点にして集まり、そこにカフェを持ち込む、という動きも、あちこちで見られる。

愛媛県松山市・三津浜。かつて松山の海の玄関口として栄えたこの町に、「木村邸」という場がある [写真3]。1881年(明治14) に建った商家を、三津浜で廻船問屋を営んでいた木村家が購入、維持してきたものである。建築当時の職人の粋な仕事とこだわりが見えるディテールがふんだんに残されているが、長年の風雨にさらされて屋根が傷み、また壁も一部崩れてきている。数年前から、この家に愛着を寄せる人たちがボランティアとして集まり、毎月第二・四土曜にカフェとしての営業を行いつつ、修復活動を行ったり、その資金を集めるためにチャリティーライブを開いたりという営みを続けている。2011年に筆者が行った時には「どぶロックフェスティバル」と題し、鍋料理とともに東温市産のどぶろくを振舞うイベントを開催していた [写真4]。外国人ミュージシャン、農業をやっている若い人たち、地元の人気DJ、町会長、行政の人らが集まり、サロン的に盛り上がっていた。

空間への愛着のもと、地域の人が集い、リラックスした雰囲気で出会い、語らう。そこに表現活動をしたい、面白い人たちと出会いたい、料理を提供したいといった、前向きで積極的な人たちが、それぞれの期待を抱えてその場に集まってくる。自分のやれることを、そこで発揮する。そして新たなプロジェクトがそこから起こってくる。木村邸を見ていると、コミュニティを直接作ろうとするのではなく、場にかかわる人々の自発的な活動の結果として、事後的に生まれてくるコミュニティの可能性というものを強く感じる。

### コミュニティを継承するプロジェクト

大阪市営地下鉄中崎町駅の程近くにあった喫茶「正」。マンションの一階で、1982年 (昭和57) から続いてきた喫茶店だが、最近ここが「中崎昭和喫茶　ニュー MASA」という名前に変わった [写真5]。

店のすぐ近くに住んでいて、お店の常連だった片牧尚之氏は、店主から「そろそろやめようと思っているんやけど、あんたやらんか？」と持ちかけられ、「お店が閉まってしまったら、今の常連さん達の行き場所がなくなってしまう」との思いから、このお店を引き継いでいる。カウンターや食器棚、椅子などは前の店のままで、店を掃除して、いらない物を捨てて、

▶写真5　ニュー MASA

ソファーなどを買い足して開業。昭和レトロな雰囲気をたたえた店としてリニューアルした。この店には、これまでの常連客が、相変わらず訪れている。

何十年も続いてきたお店には、そのお店を支えてきたコミュニティが存在している。そうしたコミュニティの結節点としてのお店を「譲り店」として引き継ぎ、その空間とともにコミュニティをも継承するという動きも、とみにリアリティを持つようになってきている。

紹介してきた事例は、コミュニティカフェが果たす機能、経済的に維持するための方法、そこで生まれるコミュニケーションの有りようの、ほんの一部である。価値観の多様化、居住空間の選択の自由化、グローバル経済の進展などにより、地域コミュニティが求心力を失いつつある中、コミュニティカフェの存在意義は今後ますます高まっていくと思われる。筆者は生活世界に必要なコミュニケーションと、それを担保する場のデザインについて、今後とも研究を続けていきたいと考えている。

やまのう・ひろし◉1993年大阪ガス株式会社入社。神戸アートビレッジセンター、扇町ミュージアムスクエア、メビック扇町、公益財団法人大阪21世紀協会での企画・プロデュース業務を歴任。2010年より大阪ガス株式会社近畿圏部において地域活性化、社会貢献事業に関わる。一方でカフェ空間のシェア活動「Common Bar SINGLES」、「common cafe」、「六甲山カフェ」、トークサロン企画「御堂筋Talkin'About」などをプロデュースしている。

参考文献
『コミュニティ・カフェをつくろう』WAC編集　学陽書房　2007年
『コーヒー・ハウス―― 一八世紀ロンドン、都市の生活史』小林章夫著　講談社　2000年
『カフェの文化史』スティーヴ・ブラッドショー著　海野弘訳　三省堂　1984年
『哲学する民主主義』ロバート・D・パットナム著　河田潤一訳　NTT出版　2001年
『ワールド・カフェ――カフェ的会話が未来を創る』アニータ・ブラウン、デイビッド・アイザックス、ワールド・カフェ・コミュニティ著　香取一昭、川口大輔訳　HUMAN VALUE　2007年
『住み開き――家から始めるコミュニティ』アサダワタル著　筑摩書房　2012年
『カフェという場のつくり方　自分らしい起業のススメ』山納洋著　学芸出版社　2012年